

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

創刊号

毎月発行

創刊 2012年(平成24年)6月16日土曜日

2012年(平成24年)6月16日 土曜日

「復興主権」獲得

やはりというべきか、この一年三ヶ月を振り返れば、政府や行政の対応は大いに期待を裏切ったものであった。

これほどの災害を前にして、常識では考えられないような無様な対応は、先進国といわれる日本ではありえないはずであったが、現実となつてしまった。

しかし、これ以上政府と行政を責めてみても事態が改善に向かうとは思えない。批判するというのは期待することの裏返しだが、期待するだけエネルギーのムダというものだ。

ならばどうするか。頼れる誰かを探している間、目の前の現実を何もせず放置したら、状況はどんどん悪化するだけである。

被災度合いにしたがつて住民の流出も激しい。生活の再建も思うように進まない。復旧・復興が進まないどころか、まちそのものがそっくり消えてしまう瀬戸際にある地域も現れている。

いまでもまちの行政機能が他地域に「仮移転」したままの地域があるが、いよいよ戻るか、本格的な移転をするかの決断を迫られているのだ。本格的な移転となれば、元のまちは消えることになる。

他方、東北といっても被災の度合いは異なり、ひとくくりにはできない。

結果として、東北被災地ということでもひとつにまとめることも容易ではない。

まさに八方ふさがりの状況である。どこから打開していくか。

まず言えることは、政府や行政はもちろん、誰かに頼る、何とかしてくれるかもしれないという淡い期待を振り切ることが必要である。基本原則として、自分たちで復興を成し遂げると決意することである。受身ではなく、住民が主導権を握り、政府や行政をリードしていくという決意である。

その範囲は、復興計画も行政に任せずに自分たちで作り、お金も手配し、民間投資も誘致し、世界から産業も呼び込む。何よりも、こうした活動を支え、継続していくために東北住民が団結することである。自らの意志でまとまっていくことである。

この意識変革なしに復旧も復興もスピードアップすることはないし、成功することはありえない。

こうした方向転換をしなれば、これからはますます間延びした復興スピードをいやというほど見せつけられていくだけである。

東北大地震が発生して一年三ヶ月で、痛みとともにこの道しかないと思つたことである。

道州制ではなく東北独立を目指せ

このところ急に、道州制論議がにぎやかになってきた。

最近では、大阪維新の会が、大阪都構想をより一層発展させ、国政進出用の政策に取り上げたおかげで有名になった。

また「道州制推進知事・指定都市市長連合」も、大阪維新の会に追随したので、一挙に次の国政選挙の争点になりそうな勢いである。

こうした勢いを借りる形で、道州制に消極的と思われてきた東北もこの流れに遅ればせながら乗っかり、道州制導入に向けて運動をしていくのだろうか。

ほんの少し前まで、道州制は分りにくい制度だった。人気もなかった。

地方自治といっても、国が担うのか、道州が担うかの違いであって、住民レベルでは行政にあまり変化はないと思われてきた。

さらに分りにくいのが、道州制は中身がきつちりと

道州制ではなく東北独立を目指せ

確定した制度ではないことである。国から地方への権限委譲について、連邦制に近いものから国の出先機関まで、数多の意見があつてどれも主流とはいえず、流動的な制度であり、導入にあつてはさまざまな課題もある玉虫色の制度である。

また、これまで導入できなかったのは、中央官僚のしぶとい反対が大きかったからである。

したがって、もし導入が決まっても、いざ導入という直前には、地方への主権委譲が官僚の巻き返しにより骨抜きになる可能性はかなり高い。

その証拠として、大がかりな地方分権も含めると、道州制論議の歴史はともかく、すでに議論だけは一世紀も続いている。つまり明治時代から続いているの時間をかけても実現に至らなかった。

これから道州制を決定するまでの長い期間があり、関連法律の改正があり、税の委譲の話があり、何らかの国政選挙もあり、紆余曲

折もたくさんあつて、導入決定ということになるだろう。おそらく何十年もかかることだろう。そうした経緯をたどり、さんざん苦労して何十年もかけた挙句に、骨抜きにされた道州制を導入するというのだろうか。

新聞創刊の意義

この電子タブloid新聞は、紙面数もたったの九ページの超ミニ新聞である。取り上げる情報も限られており、とても偉そうなことには言えない。新聞発行には

行動へ

この新聞は、評論のための評論、議論のための議論を発信することを目指してはいない。発信した内容は、極力行動に移そうと考えている。

しかし、行動といつてもデモを呼びかけるといったのではない。たいいてい発信内容は実現するには多くの困難が待ち受けているに違いない。一時の熱情で打破できるような課題ではない。粘り強く長期間に亘って同じテーマを取り上げ、賛同者を増やすことで裾野を拡大して、確実に、十二分に納得できる行動を呼びかけたいと考える。

そのための第一歩として、ここで取り上げる課題について、さまざまな研究会やサークル設置を投げ掛けていこうと考えている。

東北にも、日本国内にも海外にも、この復興のために協力しようという個人、機関、組織はたくさんあるだろう。その思いをこの新聞がつなげる役割をわずかも担いたいと考える。

東北の復興にとって、道州制が良いのか、それとも最初からきびしい道を覚悟しつつ、骨抜きのリスクを回避した連邦制、その先に見える独立が良いのか、じっくりと考える必要がある大命題であることはまちがいない。

まったく門外漢の人間たちが、ほとんどお金をかけずに、無料の新聞を毎月継続して発行することを目的に考え出した方法である。それでもこの新聞の存在意義を引き出すとすれば、誰も言えないこと、言わな

ければならないのと言わなければならないのを、遠慮なく真正面からズバリと発言することだろうと確信している。

最近、「世論」と言われるものが、本当に自分のなかにあるものなのか確信を持ってなくなってきた状況があるが、この新聞を通じて、自分たちなりの「世論」と信じるものを確信をもって発信し続けて行きたいと考えている。

この新聞が続く限り、こうした発刊姿勢をどこまでも保持しようと思う。

他の復興活動との連携を目指します

当新聞は東北復興を目指す他のさまざまな個人、組織、機関との連携を目指します。復興は、多くの個別の活動がバラバラに林立するだけでは非効率であるし、シナジー効果も産み出せないと考えます。そのため当新聞そのものが、さまざまな活動が連携を模索する場でもありたいという願いから、積極的に他の活動をPRしてまいりたいと思います。この趣旨にご賛同の活動主体の皆さんから積極的に自薦または他薦をお願いいたします。

当新聞は、皆様からのご寄付、協賛広告をお願いしております。

協力者募集

当新聞の発行にボランティアでご参加いただける方を募集しております。記事の投稿をお願いできる方、記者・編集者等としてご協力いただける方、ニュースのご紹介、その他新聞発行に関わるさまざまな業務にご協力いただける方は、下記連絡先までご連絡ください。お待ちしております。

e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

特集 東北六魂祭

5月26・27日 盛岡で盛大に開催
観衆は予想以上の24万3000人



盛岡さんさ踊り



盛岡さんさ踊り

鎮魂と供養の祭り
五月二十六日と二十七日の二日間、盛岡で『東北六魂祭』が開催され、予想以上の二四万三千人を集め、特段のトラブルもなく無事終了した。
取材を通して終始感じたのは、大震災の犠牲者やその遺族、親族、知人と今も苦しむ被災者の方々のために、東北を心の底からひとつにしよう、今はそれが最も必要なのだという静かで力強いメッセージである。
いわば鎮魂と供養の祭りであり、観光事業として多くの人を盛岡に呼ぼうというよりは二の次であった。限られた条件の下で、多くのボランティアの必死さが伝わってくることも暖かい感じの祭りになったことを



盛岡秋祭り

特に、戻り囃子(はやし)と名付けたパレード終了後の戻りの行進は良かった。すべての祭りがいつしよになり、囃子(はやし)とともに観客と一体になる。観客席からは自然に大きな拍手が沸き起こった。踊りと演奏に対する拍手の域を越え、踊り手と観客が一体化して、鎮魂と供養の祭りを作りあげ、復興への決意を誓う。そうしたことを誰もが感じ、東北がひとつになった瞬間であった。
政治だ、経済だという主導権争いでなかなか東北はひとつになれない。しかし、確かにひとつになれることをこの祭りは証明した。これを起点として東北の復興はスタートできるのだ。

この紙面にて賞賛したい。



開会式 セレモニー



山形花笠音頭



山形花笠音頭

東北の祭りについて

たかが祭りと言わなれ。いま、東北震災発生後の東北を揺るぎなく連結しているのは、まちがいくこの「東北六魂祭」である。
昨年の開催は宮城・仙台。今年は岩手・盛岡。とすれば来年以降の展開も容易に想像がつく。この固い結びつきは、今後祭りの枠を越えた大きな展開で東北の運命を左右するだろうと期待している。
東北はひとつにならなければならぬ。誰もが思っている。しかし、単純にひとつになれない要素が存在していることも確かである。
ひとつは政治である。東北が道州制を採用したら、やれど何が主導権を握るだの、いいとこ取りは許さなだのといまから目くじらを立てる。まだ統一の機運さえない状況のなかで東北の主導権争いを行っている。気が早すぎるのだ。まず統一するとう目前の大目標を達成しなければありえない話をいま争うなど、滑稽でさえある。
もうひとつは、福島第一原発問題である。この問題を東北一丸となって解決する方向に向かわなければ、福島県民からしたら、「何が東北だ」ということになる。東北は六県なのである。福島を除いた東北はありえないのだ。どういった解決方法があるのか他県も含めて、六県全体で、派生的な問題への対応のレベルではなく、問題の核心に切り込んでいかなければならない。
また、東北の祭りが盛り上がり盛るほど、東北文化の深堀りにつながる。そして東北文化とは何か、東北のアイデンティティとは何かという議論に発展して欲しいと願う。
「灯台下暗し」という。さらに東北人の控えめな性格も手伝って、自分たちの保有する東北文化の意義を過小に評価している気がしてならない。
文化は人間の誇りに通じる。戊辰戦争以後、東北人の誇りと自信は大きく損なわれた。
「東北六魂祭」を契機に、東北人が自らを見つめ直し、何者であるか、今後どのような可能性を秘めているかを突き止めて欲しい。
それがきつと復興の大きなエネルギーになることは確実である。またそれなしに満足できるレベルの復興の実現はありえないとここで断言する。



青森ねぶた祭



巨大なわらじ



仙台すずめ踊り



福島わらじまつり



秋田竿燈まつり



戻り囃子



秋田竿燈まつり

生涯初取材の記

アラ還にして、今回の取材が生涯初の体験でした。最初は事情もよく分からず、すべてがおつかなく、つくりでしたが、記者デブューは本当に楽しかった。

報道陣席の抽選場所を間違え、時間に遅れ、最後に残ったのが、バス停の長イス。しかし、長時間の撮影には最高の場所、残りものに福。ゆつたりした報道陣席をあてがわれて、後ろにすごい数の観客がひしめき、記者さんはスペースに余裕があつていいと後ろから皮肉を言われつつの取材。横には、大新聞社の若手カメラマンや地元TV局のクルー(アナウンサーつき)が陣取り、素人記者としては多少

肩身が狭いと感じました。が、祭りが始まれば関係ない。

二台のカメラ(他の報道機関の機材に比べると何じやそれ、と言われかねないカメラ)を同時にあやつり、動画と写真撮影を同時にやつてのけ、ひとり悦に入る始末。撮影時は、まあまああつて来たと思いましたが、あとで見ると、使えない。やはり素人にすぎないと反省しきり。

とはいえ、撮った数だけはすごい。約二時間半で動画は九、写真は三三五枚でした。使えないのじゃいくら数が多くてもダメですが、でも祭りはすばらしかった。これぞ東北の祭り、鎮魂と供養のための祭りでした。

来年は福島の開催予定、どんな祭りになるか今から楽しみであり、ドキドキです。今回、こうした機会を与えていただいた「六魂特派員さん」に感謝、感謝。

最後に食の話。冷麺派の記者がうまい店を探し回ったところ、道行くおばあさんの強力な薦めで「盛楼閣」へ。



盛楼閣の冷麺



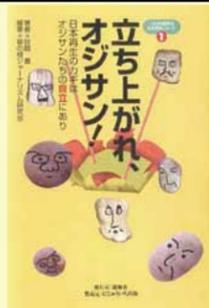
『東北独立』 砂越豊 著
価格：1,260 (税込み)

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる



河北新報広告掲載
2012.2.12
2012.3.13

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。



『立ち上がれ、オジサン！』
砂越豊 著



『もうひとつの構造改革』
砂越豊 著

※電子新聞創刊特別値引

上記2冊ともに 1260円⇒500円(税込)

遊無有出版

検索

遊無有出版
YUMUYU Publishing

立川事業所 042-512-9833
本社 042-562-3507

立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
本社 contact@yumuyu.com



早坂あつし氏

仙台市議会議員

早坂あつしに聞く

仙台市議会議員、みんなの党・早坂あつし氏にシリースのトップバッターとして登場していただいた。

早坂氏は、議員になるまでは政治にまったく縁がなかった。今ではまったく面影もないが、学生時代からパンクロッカーとして活躍したということで、反体制のパンクロック精神で、現在の行き詰った政治を本気で壊し、新たな政治の歴史を開こうとしておられる。

同時に、志があれば、政治参加も充実した生き方

「復興東北実行会議」について

上杉鷹山公の命日(文政五年三月十一日)「一八二二年四月二日」(死没)であり、思いを持って設立の日と決めました！

三条からなる藩主としての心得である。

「伝国の辞」
一、国家は先祖より子孫へ伝え候国家にして我私すべき物にはこれ無く候
一、人民は国家に属したる

プロフィール

一九七一年(昭和四六年)三月十一日
仙台生まれ 仙台育ち
みんなの党
宮城県支部 青年局長

昭和五四年仙台市立八幡小学校卒業
昭和六〇年仙台市立三条中学校卒業
平成元年私立東北高校卒業
平成三年仙台市議会議員初当選

四大家族。
現在、仙台市青葉区に在住。民間企業出身の市民目線で政治に新風を吹き込もうとされている政治家。
「仙台の復興が日本を変えよう」というのが仙台市政への取組み姿勢でもある。

また、県議員と仙台市議会議員合わせて一四人もいるが、そんなに必要なのか？個別の選挙区ベースでみるとさらに多すぎる感じが分る。選挙で自分を苦しめることになるがやり削減は不可避だ。

同じ政令市・大阪からの大阪府構想もあつたが？

大阪市の教育改革の迅速さに学ぶべき。仙台市もやれるのにやらない。要はやる気の問題だ。

一方、仙台市で学区制をなくして、地域コミュニティを崩すのは反対。それは今回の震災で痛感した。地域の助け合いは、学区制とも密接だ。近所の子供たちと地域住民が顔見知りであるような生活は仙台市ではまだ可能だ。失くしたくない。文部科学省の一方的な押し付けは実情に合わない。教育問題は県や市に権限委譲すべきだ。

仙台市の復興・復興事業の現状についてはどうか？
新聞報道等で周知のように、人件費高騰で復興・復興事業の入札が芳しくな

市と県の二重行政問題？
この問題を解決する方法として、道州制導入で一挙に解決するという考え方もある。二重行政は、お金と時間と労力のムダである。県庁と市役所はすぐ目の前にあるのに、お互いべールに包まれて見え、だから協力しあうこともできない。

た。それで人件費を七一八%引き上げたが、末端ではあまり変化がない。結果、入札率は上がらない。他県の人間の姿も目につく。地元の雇用につながっていないのか不明だ。他方、仙台市の繁華街はミニバブルの様相だ。これでは人材派遣業が忙しくなるだけ。

復興イベントである昨年の「東北六魂祭」とパンダ誘致について
「東北六魂祭」は開催が一年早かった。震災後の混乱が続く状態での実施で混乱した。今だったら良かったのに残念だ。しかし、日本人の復興支援の心が、あれだけの予想を超えた人を集めたので、そのことは賞賛されるべきだ。

他方、パンダ誘致はいま税金を投入してまでなすべき事業かどうか疑問だ。
福島の放射能問題？
先日、超党派の議員で福島島の放射能高度汚染地域を訪問した。検知器は鳴りつ



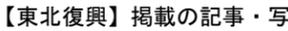
歓談の様

放しで、あまりにも惨憺たる状況であり、震災直後から何も変わっていない。何とかしなければならぬ。
仙台にも放射能問題？
小さい子供を持つ母親の問題意識はいまでも高く、知識はかなりのものだ。いざいざ問題化してくる。
仙台も、宮城も、他地域から見たら、福島同様の放射能汚染地域という位置づけであることを認識すべきだ。風評被害もすでにあります。
市内の農業や水産業の復興・復興はどうか？
市内の専業農家は驚くほど少ない事実を多くの人には知らない。また農業への民間参入であるアグリビジネス、株式会社化、水耕栽培などは有効な方策である。会社組織にして、社員になる方法も考えても良い。道州制導入により従来の発想を大きく切り替え、「農業仙台モデル」を構築すべき。

他方、水産業は、県と漁協の対立でなかなか進まない。でも、方法は見つかるはずだ。
仙台市の復興後の役割？
仙台市が復興しなければ東北の復興はないと断言できる。先陣を切つて是が非でも復興を成し遂げる必要がある。とはいえ道州制実現の折に仙台が州都になるのは避けるべき。それでは道州制はまともでない。
東北は元に戻るのか？
没落か？それとも？
問題山積の震災前に戻しても仕方ない。また、復興事業もいつまでも続かない。そのカンフル剤が切れた後に備えることが不可避だ。
東北の潜在パワーを引き出すことは可能だ。それを「復興東北実行会議」のような超党派の議員で実現していきたい。ヤル気は十分だ。

とはいえ、目前の課題をひとつずつ解決していく粘り強さも求められている。それを行うのが政治家の役割だし、政治家にしか出来ないことだ。
東北の政治家には「平成の維新は東北から」という気持ちがある。しかし戊辰戦争で敗れた東北に「維新」は禁句だ。「東北復興会議」となった理由はここにある。
次の選挙で目指すもの？
次の国政選挙は「中央集権」対「地域主権」が対立軸となる。みんなの党は「一〇〇人を擁立する」。

道州制はよく理解されていない。分かりやすい言葉で表現することは必要だ。国と県や市の権限委譲の問題ではなく、住民が主役となり地域の政治が変わることだと伝える必要がある。
「東北独立」を旗印に 東北を一つに
この新聞を手掛けている砂越豊氏は、「東北独立」というタイトルの書籍を上梓している。「東北」の「独立」？恐らく、東北に住む多くの人にとってはまったく寝耳に水、それこそ想定外の話であろうと思う。「なぜわざわざ独立しなければならないのか」といえないのか。「東北が独立したってやっつけていけないことは目に見えているじゃないか」、そう言う人も少なからずいるに違いない。ただ、ここでそれが本当にそうなのか、あるいは単なる思い込みであるのかを考えてみることは意味のあることではないかと思う。
「独立」、つまりここでは「日本国からの独立」ということであるが、この「独立」について将来取りうる選択肢の一つとして検討してきた人がいる地域は、実は東北以外には存在していない。具体的には、北海道や沖縄などである。最近では黒岩神奈川県知事が神奈川県の「独立」を目指すことを表明して話題になった。北海道では、例えば白井暢明氏が「北海道独立論」を以前から展開している。白井氏の試算によると、「独立」に伴う収入減は北海



大友浩平氏

執筆者紹介

大友浩平

(おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」
http://log.livedoor.jp/anagnasi/
Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.otomo

その北海道の「お手本」となる「国」がある。イギリスのスコットランドである。スコットランドも北海道と実によく似た境遇にあった。古くは石炭の産地として栄え、その後スコットランド開発公社が多額の開発予算を投じて公共事業を行い、地域経済を支えてきた。そのスコットランドは一九九九年、ブレア政権の地方分権政策の下で、事実上の内政独立を果たしている。外交や防衛についてはイギリス政府に委ねるものの、「自分たちのことは自分たちで決める」体制が実現しているのである。北海道もスコットランドの動向には大いに注目していたらしく、「独立」から四年後の二〇〇三年に視察団を派遣して調査を行っている。その調査報告書は今も北海道のサイト内で閲覧できる。

一向に進まない「地方分権」

さて、翻って我がが東北である。東北では少なくとも「独立」という話は寡聞にして聞かない。その理由は何なのだろうか。かつてこの地域は「蝦夷(えみし)」という「異民族」が住む朝威の及ばない化外の地とされていた。奥州藤原氏の時代の前に東北に起こった二つの大きな戦はそれぞれ「前九年の役」「後三年の役」と呼ばれている。戦いに「役」という言葉がつくのは、元寇と呼ばれる「文永の役」「弘安の役」を見ても分かるように、「対外戦争」のみである。すなわち、「蝦夷」の住むこの地は、「日本」とは見なされていなかったのである。

蝦夷の族長アテルイは、朝廷軍の「侵略」に対し、自分たちの「独立」のために敢然と戦った。それ以外にも東北の地は度々中央から攻め込まれてきた。源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした「文治五年奥州合戦」、豊臣秀吉による「奥州仕置」、そして明治維新に伴う「戊辰戦争」など、いずれも東北は中央から敵とされ、新体制樹立に向けた総仕上げの対象とされた。東北に住む人はそうした悲劇がもう二度と繰り返されないように、ことさらに「こは日本の一部である」と意識し、理不尽なことにも黙って耐える

ようになってきたのではないだろうか。

もちろん、中央集権国家と呼ばれるこの国で、中央が地方の実情を地方以上によく知り、それに応じた施策を適時に打ち出しているのなら別に問題はない。しかし、現状がそうであると考えられる人はほとんど皆無というのが実情ではないだろうか。それができないのなら、「地方のことは地方に」ということで権限の委譲が実現すればよいのだが、それも望むべくもないようである。

今回の震災における対応を見て分かったことは、「中央」は予算も権限も「地方」に委ねようとする考えを全く持っていない、ということである。鳴り物入りで設置された復興庁は単なる国の出先機関以外の何物でもなく、復興を推し進めようという「エンジン」よりは、地方のアイデアに待ったをかける「ブレーキ」としての役割に秀でているようである。この辺りは、インドネシアがかのスマトラ地震の後に被災地に設置し、強力な権限を持って復興を推し進めた「復興再建庁」とは対照的である。

本来、政権交代が実現した暁には、中央集権政治から「地域主権政治」への転換が実現しているはずであったが、多くの他のマニフェストと同様、まったく実現する気配すらない。都道府県を全国で九十三の「道

州」に再編する「道州制」も第二八次地方制度調査会で答申されたが、その後具体的なアクションは何も起こっていない。この未曾有の大震災を経てすら国の統治構造が変わらないのである。今後自ら変わること

は期待できないに違いない。よく、道州制を議論する際によく話題になるのが、自分たちの県がどの道州に入るのかという「区割り」の問題だが、道州制については、道州を受け皿とした権限の移譲もセットで進めないと、単に都道府県が合併しただけの結果になりかねない。それでは何も変わらない。今の北海道と同じくらいの面積を持つもの、自分たちのことを決める権限を何ら持たない「名ばかり道州」ができるだけである。

ただ、現下の一番の懸念は、「東北独立」に向けて協働すべき東北六県の知事の道州制に対するスタンスがあまりに違いつぎるということである。かつては、特に北東北三県は二〇一〇年の「合併」を視野にまさに協働していたが、それぞれの県で「政権交代」が起こった結果、結局この合併は現在に至るまで実現していない。六県知事の中では村井宮城県知事が道州制に前向きだが、村井知事が道州制に前向きになればなるほど、仙台への「極集中を懸念する他の五県知事が後ずさりする」という構図がある。これでは東北が一つになることなど不可能である。かねてから震災復興のために、まさに東北が一つとならなければいけない時であるのに、道州制への呼び水となるのを恐れてか、広域連携への道筋すら立っていないのを見ていて歯噛みする思いである。

村井知事は仙台を「州都」にしたいのかもしれないが、

広域連携すら遠い東北の現状

本場に権限を持った「自分たちのことは自分たちで決める」体制をつくるためには、「道州制」をゴールとしては恐らくダメである。結果的に予算と権限を持った道州制に落ち着くにしても、それを実現させるためにはそれよりもっと大きな目標を持つことが不可欠である。それくらいの「大風呂敷」を掲げてそれに向

かっただけの結果が、各道州が実

質的権限を持った道州制になる、そうしたプロセスは大いに有り得る。では、その「大風呂敷」とは何かと

言った場合に、その旗印としてふさわしいのが、「東北独立」である。「東北独立」を掲げて、中央からの権限と予算の大幅な移譲を要求していく。その落とし所が道州制ということであれば、よもや「なんちゃって道州制」となることはないと思

われる。そこで村井知事に提案したいのは、「道州制が実現した暁には州都は仙台以外に定める」ということを他の五県知事に対して確約するということである。

「州都」は平泉がいい

さらに言えば、「州都」は平泉がいい、と私は考えている。そう、昨年世界文化遺産となった震災後の東北を勇気づけてくれた、あの平泉である。

当時、東北地方のほぼ全域を支配した奥州藤原氏初代の清衡は、平泉の地に本



抛を構えた。なぜ清衡は平泉に本拠としたのか。それは「国土の均衡ある発展」を企図したことだった。奥州藤原氏の前に奥六郡と呼ばれた岩手県南部を支配した安倍氏の拠点は平泉より北の衣川(現在の岩手県奥州市衣川区)にあった。その場所を引き継がず、敢えて南下した理由は、何より平泉がまさに「東北の中心」だったからである。北緯三七度に位置する東北の南端、白河の関(現在の福島県白河市)から、北緯四二度に位置する東北の北端、外ヶ浜(現在の青森県青森市)のちょうど中央、北緯三九度地点に平泉はある。奥州藤原氏が支配した地域のちょうど中央が平泉だったのである。

現在でも、平泉を中心に、平泉から北八〇キロメートルに盛岡市があり、南八三キロメートルに仙台市がある。これら二都市は南北から平泉を支えると同時に、他の都市とも有機的に連携する役目を担える。盛岡市の北に青森市、西に秋田市があり、仙台市の西に山形市、南に福島市がある。すなわち、平泉を中心にその外側に盛岡、仙台、さらにその外側に青森、秋田、山形、福島という現在の県庁所在地が配置され、そしてそれらはすべて新幹線及び高速道路でつながっている、という非常にバランスの取れた構図が浮かび上がる。これはまさに「国土の均衡ある発

展」のためにふさわしい形である。これに対して、仙台は東北全体から見るといかにも南に寄り過ぎである。

現在の平泉は面積約六三平方キロ、人口約八千人の小さな町である。この小さな町に東北全体の州都を置いて事足りるのかという懸念もあるかもしれない。私はこの小ささが逆によいと考える。州都は必要最小限の権限を持ち、あとは各地域がより大きな権限を持つべきである。それには平泉の「小ささ」はうってつけである。仙台などに州都を置いたら、それこそ何でもかんでも仙台が抱え込んでしまうことにもなりかねない。「極集中」を許さない物理的な好条件を、平泉は持っているのである。

九〇〇年前の「自治政府」を再建する

平泉が栄えた時代は、東北が一つとなって栄えた時代でもあった。奥州藤原氏初代清衡が後三年の役を生き延びてから、四代泰衡が源頼朝に滅ぼされるまでのおよそ百年の間、東北には大きな戦乱がなかった。今の世界にも誇れる理念を掲げ、それを具現化した仏教文化が平泉を中心に東北各地に花開いていた。その意味で平泉は、東北の統合と繁栄の象徴的存在である。それもまた「州都」にふさわしい要件である。

村井知事には、このような論拠を以て、ぜひ「仙台以外の州都」を宣言してもらい、他の知事の疑心暗鬼を払拭してもらいたいと思う。仙台は、「ワシントン」ではなく「ニューヨーク」になればよいのである。東北の古代・中世史研究の第一人者、高橋富雄氏はその著書「平泉の世紀」の中で、奥州藤原氏の政治について、「(奥羽では)朝廷も国府も、摂関も院政もそのままにいただきながら、実際にはこれを名目上の主権に棚上げし、その執行権の全権を掌握した『委任統治制度』を実現していた。『在国司』と呼ばれるこの奥羽行政権は『事実上の自治政府』として、『幕府政治』のはじまりになっていくものである」といみじくも指摘している。今、東北が目指すべき道は、この、九〇〇年前に東北の地に実現していた「自分たちのことは自分たちで決める」仕組みを、もう一度つくり上げることである。それがこそがまさに「東北の独立」なのだろうと思う。そのため必要なこと、それはまず九〇〇年前にこの地にいた人たちが持っていた気概を取り戻すことである。そして、今、目の前にある現実を当たり前のもの、変わらないものと捉えるのではなく、変わる余地のあるもの、自分たちの手で変えられるものと捉える、すべてはそこから始まるに違いない。

東北の偉人たちが 復興にかけた東北人 — 後藤新平と吉野作造 —

「歴史のはじまり」

かつてフランシス・フクヤマは『歴史の終わり』(原題 The End of History and the Last Man、一九九二年)においてイデオロギーの終焉を宣言し、国際政治の安定化と現体制の緩やかな持続を予想した。しかし二〇〇一年に起きた九一一テロ事件によってその予想は大きく裏切られることとなったのは言うまでも無い。さらにそれから十年後に起きた三一一の大震災は、政治・経済体制という表皮ではなく、人間存在の根までも大きく変えることとなった。個人主義が利己主義として誤用され、共同体へのつながりを見失って

いた私たち、特に被災の現場で生きてきた東北の人々は、社会契約を持ち出すまでもなく、アプリアリに他者へ同情・共感し、無償のままに行動することを目の当たりにした。いわば「精神」のレベルで地殻変動が起こり、堆積物が掃きさらたのである。私たちは新たに「人」としての歩を進めていかねばならない。その際に私たちは先人の歩みを亀鑑とする必要がある。

関東大震災と東北人

一九二三(大正十二)年九月一日、午前十一時五八分に起きた関東大震災は、相模湾の北西部を震源としマグニチュード七・九を記録した。震災の死者・行方不明者は約十万人に達した。

シリーズ：東北の偉人たちが

東北には多くの偉人がいた。東北人らしく、小手先ではなく、真正面から時代の状況に真摯に向き合い、大胆かつ自由で、グローバルな成果を残した偉人たちがたくさん存在した。時代を先取りし、日本をリードしてきた偉人たちがいる。

いま、この大震災とそこから復興実現という難

局にあたり、支援の手は同時代人からのものにとどまらない。多くの先達の危機に立ち向かう勇氣と意気込み、そして知恵に学ぶべきものは多い。

こうした観点から、シリーズで、多くの東北の偉人を取り上げていく。

最初に取り上げるのは後藤新平と吉野作造である。

明者は十万五千人余にのぼる。震災が全国に報道されると、各地の個人、宗教団体、青年団などから被災地において食料や応急物資が輸送され、義援金品が募集され、被災地では全国から派遣された救護隊が被災者の治療や炊き出しに従事した。また、アメリカやヨーロッパ諸国、中国など多くの国から義援金や救護物資が日本に届けられた。特にアメリカではクーリッジ大統領と米国赤十字社が協力して国民に義援金募集を呼びかけ、短期間で目標金額五〇〇万ドルを上回る額が集った。

また物資だけではなく救護活動も活発に行われ中国などから医療団が派遣された。国内外からの多くの救護・復興活動のなかで注目すべきは、東北人が大きな活躍を見せたことである。このうち、帝都復興院総裁として迅速かつ大規模な復興に成功した後藤新平(二八五七〜一九二九、現在の岩手県奥州市出身)、震災後に起こった朝鮮人や社会主義者の虐殺事件を厳しく追及し、また慈善事業から社会事業への転換を説いた吉野作造(一八七八〜一九三三、現在の宮城県大崎市出身)の事跡を紹介したい。

I 後藤新平



後藤新平

震災の翌日(九月二日)、後藤新平は敵対していた山本権兵衛の元へ駆けつけ、ともにこの大惨事に対処することを決意し、内務大臣として入閣した。後藤は親任式から帰宅するとただちに帝都復興の構想に取りかかる。後藤は最新式の都市計画を導入し防災機能を重点的に向上させた新しい首都として東京をつくりかえる方針を決め、同月六日に「帝都復興の議」を閣議提出した。さらに二七日には帝都復興院が創設され、後藤は初代総裁(内務大臣との兼任)として、まさに復興の大黒柱となる。帝都復興院の計画局長には、都市計画のスペシャリストで内務官僚の池田宏、建築局長には東京帝国大学教授で耐震構造論の権威である佐野利器を登用、さらにアメリカの高名な歴史学者でニューヨーク市政調査会専務理事もつとめたチャールズ・ビアードを招聘し、考え得るかぎりの最高のスタッフで復興に取り組んでいく。

十一月には計画案の骨子や予算もかたまる。提出された計画には、幅約二二メートルの幹線街路及び幅約十一メートルの補助街路の建設、防災用の公園や緑地の確保、街路または運河などの施設新設に関わる市街地の区画整理、横浜港や隅田川河口の港湾整備や両港を結ぶ運河の施設などがあつた。また復興費は全体で十二億円、そのうち五億円は他の省庁へ配分、七億二千万円が帝都復興院の予算とする概算ができた。その後修正を経て、翌月(十二月)二四日には最終的な計画・予算ができた。

後藤の主導による帝都復興計画は、厳しい財政事情と政治的対立の影響で変更や縮小を余儀なくされたものの、世界初とされる既成市街地における区画整理事業や街路、橋梁、運河の大規模な整備が実行された。復興事業によって整備された幹線道路には靖国通りや

昭和通りなどがあり、当時最新の技術によって舗装がされた。また東京の隅田公園、錦糸公園、浜松公園、横浜の山下公園などこの際に設置された。その他にも隅田川に架かる永代橋な

どの橋梁や上下水道も整備され、結果として復興事業は東京の近代化を後押しした。これらの多くは現代でも見ることができ、復興計画の成果が大きかったことがわかる。

◆執筆者紹介◆吉野作造記念館 副館長 大川真氏



略歴

氏名 大川 真
1974年 群馬県生まれ(父は岩手県出身)
1993年 群馬県立沼田高等学校卒業
1998年 東北大学文学部卒業
2000年 東北大学大学院文学研究科博士課程前期修了(修士(文学))
2008年 東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了(博士(文学))
2011年3月まで東北大学大学院文学研究科助教。同年6月から吉野作造記念館に勤務(副館長)。国際日本文化研究センター共同研究員、山形県立米沢女子短期大学非常勤講師を兼任。専門は日本政治思想史・文化史



吉野作造記念館外観



常備展の様子



吉野作造

II 吉野作造 朝鮮人虐殺事件・ 甘粕事件に対する 吉野の行動

関東大震災では混乱した社会状況のなかでデマや暴力が公然とまかり通り、朝鮮の人々や社会主義者が虐殺されるとい痛ましい事件が起こった。自らの危険を顧みず真相を追求し、正々堂々と輿論にその非を厳しく説いたのが大正デモクラシーの旗手吉野作造であった。

吉野が事件を知ったのは九月三日と思われる。その日の日記には、事件に対し「苦々しき事限りなし」という憤慨の言葉が記されている。吉野は積極的に事件の真相究明に取り組んだ。まず、改造社が提唱した知識人の集団「二十三日会」の一員として、朝鮮人虐殺問題を取り上げ、政府の責任を問う決議を行い、これを首相、内相、法相に

提出し、また『中央公論』一九二三年十一月号に「朝鮮人虐殺事件に就いて」を發表、「世界の舞台上に顔向け出来ぬ程の大恥辱」と非難した。

いわゆる「甘粕事件」について、吉野が知ったのは九月二日であった。日記には、「騒ぎを幸に不正を働く点に於て戒厳司令部の如きは火事泥の隊長と謂はざるべからず」と書かれている。『中央公論』一九二三年十一月号には「軍警官憲の社会的思想戦への干入」を發表し、軍警官憲が思想問題に職権を行使すべきでないことを主張した。さらに『東京朝日新聞』一九二三年十月十五日付に「甘粕大尉の減刑運動に就て」、「改造」一九二三年十一月号に「甘粕事件の論点」を發表し、甘粕への減刑運動を非難した。また、左傾的傾向にある者を「悪者」と断定し、上官の命令に絶対服従し上下関係のもとに圧迫する「軍隊主義の横行」や、軍人中心で構成される「軍法會議」の制度を厳しく批判した。

慈善事業から 社会事業へ

一九一七年(大正六)三月、吉野は東京帝国大学学生基督教青年会(東大YMCA)の理事長に就任するが、吉野ら東大YMCAメンバーを中心に、キリスト教の趣旨にもとづき、婦人と小児の保護、保健、救療の目的を持って社会事業団体「賛育会」が翌年(一九一八年)三月に設立される。賛育会は、一九二六年(大正十五)には財団法人となり、吉野は二代目理事長に就任、経営方針も実費主義を採り、慈善事業から自立を促すための社会事業へと転換した。吉野が理事長時代に行った社会事業のなかで特筆すべきは「平和村」の設立である。被災者の住宅供給のために、内務省は震災の翌年(一九二四年)に財団法人同潤会を設立した。同潤会は集団住宅を建設するが、そのうちの二つに砂町集団住宅(現・東京都江東区)があった。砂町集団住宅は一九二六年(大正十五)十一月には管理困難として賛育会に譲渡され、賛育会は住民たちの自主自立を育成に力を注いでいく。賛育会では「平和村」と称し自治的運営のために、住民から「村長」、「村会議員」を選出。また、セルロイド玩具や練炭ストーブの製造などの授産事業を行ない、住民の生活安定のための指導援助を行なった。

吉野は「慈善事業の本質」という文章において「終局の目標はどこまでも利用者の自治と云ふ所に置かねばならない。一日も早く其設備が利用者自身のものとして成り立つていく様にしてやらなければならぬ。そして一体この事業はその昔何人によつて創設されたかなどのことが頓と忘れられる様にならないならば、本當の成功とは云へない」と語っている。「人間のうちには理想的なものが内在し、機会さえあれば無限に発達していく」という人間観が、吉野の社会事業への理想の基調をなしていた。

新しい東北人像

かつてE. H. カークが述べた、歴史とは「現在と過去との不断の対話」(An unending dialogue between the present and the past)というあまりに有名な言葉は、震災後の今、私たちに相当の重みをもつて迫ってくる。

東京の後背地 (hinterland) として、食料や電力を供給しつづけてきた東北。江戸にまわす本石米が優先されて飢饉があれば多くの餓死者を出し、原発事故が起これば土地を追われ生活を奪われた東北。「やぶれたもの」「おくれたもの」という東北人象とは今こそ「離別」しなければならぬ。ただしこの東北人象は他から押しつけられただけでは

なく、自分から甘受し再生産してきた自画像という性質を強く持つており、私たち東北人自身が自らの手で東北人像を確かに新しく描くことが喫緊の課題である。その際に手がかりとなるのが、アテルイ(阿弖流爲、阿弖利爲とも)が坂上田村麻呂に敗れる以前の東北、とくに縄文時代の豊かな文化のあり方である。ナラ・ブナなどの落葉広葉樹が豊かに生い茂った山林のなかで採集・狩猟を中心とした生活、独特の縄目模様を持つ縄文土器に象徴される美しさは、今でも多くの人々を惹きつけてやまない。縄文期の東北を見つめることが、一元的な国家ではなく、多元的な社会を考えさせる契機となっていることは大いに歓迎すべきことである。ただしここで特に強調したいのは、縄文期以降も東北には誇るべき文化があまた

存在していること、また「中央」とのアンチノミーやルサンチマンのみで東北を語ることはかえって東北の多元的で豊かな可能性を矮小化してしまうことになりかねない。私たち東北人に最も必要なことは、私たち自身を知ることである。東北の歴史を深く見つめ直し、東北の先人たちが学ぶことである。

後藤新平や吉野作造らの言動を振り返った今、私たちは新しい東北人の姿を目のあたりにした。復興後の豊かな社会を構想し、それを迅速に実現させた驚くべき行動力。冷静に社会をみつめ、危険を顧みず警鐘を鳴らす勇氣。一身をなげうち、被災者の自立とその支援に邁進するひたむきさ。三一一以降の現在に通じる大事なことを私たちの先人たちは力強く温かく教えてくれる。



平和村の賛育会共同売店

吉野作造博士の功績や人間性などを知りやすく紹介するため、「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)の場をコーディネートしています。また、展示室の中心には、0.9mのタッチスクリーンと三面ディスプレイがあり、上映時間になるとタッチスクリーンが動いて「われらが同時代人 吉野作造」が映し出されます。

吉野作造博士の功績や人間性などを知りやすく紹介するため、「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)「アテロイ」(アテロイの人、吉野作造博士)の場をコーディネートしています。また、展示室の中心には、0.9mのタッチスクリーンと三面ディスプレイがあり、上映時間になるとタッチスクリーンが動いて「われらが同時代人 吉野作造」が映し出されます。

吉野の生涯を、世界・日本の動きと対照させながら展開。
政治学者・思想家として吉野を紹介。
吉野の政治・社会運動とのかかわりを言論人・政治家の側面から紹介。
国際主義者としての吉野を、ロシア・中国・朝鮮半島など重点を置いて紹介。
思想形成のもととなった博士との関わりや家族構成などを紹介。

常設展示室
中庭1
中庭2
中庭3
研修室・企画展示室
インフォメーション・事務室
休憩ラウンジ

常設展示室
タッチ型スクリーン
プロローグ
アカデミズムの人 吉野作造
ジャーナリズムの人 吉野作造
吉野の生涯を、世界・日本の動きと対照させながら展開。
政治学者・思想家として吉野を紹介。
吉野の政治・社会運動とのかかわりを言論人・政治家の側面から紹介。
国際主義者としての吉野を、ロシア・中国・朝鮮半島など重点を置いて紹介。
思想形成のもととなった博士との関わりや家族構成などを紹介。

末は博士か大臣か

吉野作造博士のおとと吉野信次商工大臣が求めた「豊かな日本」の経済理念とは――

2012 5/27日→7/29日

【開館時間】午前9時から午後5時まで ※入館料は必ず午後4時30分まで
【休館日】毎週月曜日 ※ただし祝日や夏期休暇日の場合は変更あり
【入館料】一般500円 高校生300円 小・中学生200円

〒080-0105 宮城県大崎市吉野町一丁目2番3号
TEL:0229-23-7100 FAX:0229-23-4879
http://www.yoshinosakuzou.jp/

「自立した小国」への復興

スコットランドと東北

「東北復興」という単語は、既に使い古されていると思う。

関東大震災復興、戦後復興・・・と昔から使われていたのに、まるで今回の震災の為に作ったかのように「東北」という単語とセットになつてしまっている。皆がこの四字を見て、わかつたように通り過ぎていく。

東北の復興は、まだまだ途上である、という。では、どういう形が完結なのだろうか。

震災前の姿に回復すれば、それでいいのか。

若者が年々地元を離れて



奥羽越列藩同盟 奥羽越列現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

いき、原子力施設でも受け入れなければ町も生活も維持できなくなるような、そんな東北に居ればいいのか。

所詮、東北はそういう土地だ、というなら仕方がない。しかしそうでない時代がこの東北にかつてあり、よりよい東北の未来の為に戦い倒れていった人々がいたとしたら。

「東北復興」とは、かつてあつたかも知れない、あるいは未だあつた事のない、東北のあるべき姿を求めていく事ではないのだろうか。だとしたら、それはまだ始まつてすらいないのかも知れない。

震災当時、被災した人々が他人を気遣い、暴動も起こさず冷静に行動したという事で海外の賞賛を集めた事は記憶に新しい。

「日本人の美德」と言われ東京のマスコミ上でも誇らしげに語る人がいたのだが、同じような災害が関西や九州で起きたらもつと混乱していたのではないのか、という意見もあるようだ。

そういうえば、芸能界は関西や九州の出身者が多い。他人を押しつけて生き残っていく、という気性は芸能界では逆に美德かも知れないのだが、確かにそういう人は東北には少ないように思う。

ふと、私はこうした災害がイギリスの、北の地方などで起こつたとして、地元の人々が同じように賞賛された場合「英国人の美德」と表現されるだろうか?と思つた。

否。決してそうは言われないだろう。「スコットランド人の美德」と何の疑いもなく、おそらく国内外が認めるに違いない。

それほど世界に知られた国名でありながら、スコットランドは独立国家ではない。イギリス、つまり大英帝国の一地方に過ぎないのだ。英国のスコットランド、とは「日本の東北」ということ事実は同じ、という事である。にもかかわらず、スコットランドの人々は自らを一つの国のように呼び、誇りにしている。一方で実は、厳しい自然や陸続きの王国からの度重なる侵略の歴史、その王国への劣等感、とわが東北に共通した側面をも持ち合わせる。

では、東北とスコットランドは何が違うのか。この両地方が属する、各々の世界にしばし想いを馳せ、東北の進むべき未来のヒントを探してみたい。

西洋の果ての「英国」、東洋の果ての



「日本」。片や「白色人種」片や「黄色人種」と基層の種族は違つても、小さな島国にして大帝國を称したという点で両国はよく似ている、と言われる。しかし実はその共通点はむしろ、その周辺を固める国の「構成員」の存在によって極められているのではないかと、私には思えるのである。

その構成員とは、その地の先住民であり、その国の基層ともなつた存在と言えらる。大雑把ではあるが、英国では「ケルト人」、日本では「縄文人」と呼ばれる人々がこれに当たるだろう。

実はどちらも単一の民族という訳ではなく、各々の歴史はあまりに長く、その層はあまりに厚い。両者が解明されていない謎も多い。ケルト人とは、もともと現在のフランスほかヨーロッパ中に繁栄した、共通の文化、言語系を有した集団である。

縄文人、もまた二万年以上に渡る繁栄の中で、幾度もの種族の推移・混在、文化の移行・融合が繰り返さ

れた。この東西両極の先住民たちは不思議な事に、ストーンサークル、ドルメン(支石墓?)などの巨石文化(ケルトの場合、彼ら以前に先住した謎の種族が残した物とも)、渦巻文様による装飾、全ての事象に神が宿るとするアニミスム信仰(一説には蛇信仰も)などにおいて共通しており、更に彼らを長年に渡り侵略し苦しめる事になる「帝国」からは「勇猛なる蛮族」として怖れられる存在となる歴史もまた、酷似するのである。ケルトにとつてその「帝国」とは彼らをヨーロッパ大陸より駆逐したローマ帝国、そしてアングロ・サクソンの勢力がブリテン島南半に建国したイングランドであり、縄文人にとつては、天皇を頂点とする「大和朝廷」即ち日本国であつた。

ケルト人たちは現在のアイルランド、スコットランド、ウェールズ、マン・シェトランドなどの島々、イングランドのコーンウォール地方、フランスのブルターニュ地方、スペインのガリシア地方といった、まさにヨーロッパ各地の北西端といえる地に生き延びる。更にアメリカ、カナダ、オーストラリアなどへの移民の流れに乗り世界中に広がつたが、これら小さな地域の人々の多くは「ケルトの国」としてアイデンティティを自認し、この中で唯一、アイルランドのみが二十世紀前半に国家としての独立を取り戻したのである。

対して日本列島では、大和朝廷という国家統一を目論む勢力によって西南の九州においては熊襲・隼人と呼ばれる人々が、関東北陸そして東北においては蝦夷と呼ばれる人々が抵抗勢力として討伐対象とされた。このうち広大な地盤をもつ東北の蝦夷が、長年に渡る抵抗の伝統を持ち続けるも同化され、更に北方のアイヌ民族、南方の独立国・琉球もまた日本という国家に組み込まれていく。日本列島においては、再び独立を果たした地域は現れていない。

アイデンティティとは何か、と思ふ。そもそも、日本国を建国したとされる「大和民族」とは、列島の先住民である縄文人と後の渡来人の一派の合体であり、「王国」とはこの王国側が支配の外に存在として勝手に呼んだ可能性が高い。つまり「大和民族」も「蝦夷」も、もとは幻想である、と言える。一方、アングロ・サクソンの国、を意味するイングランドでも住民の大多数には先住のケルトの一派・ブリトン人の血が流れているし、逆にアイルランドやスコットランドの住民の多くがアングロ・サクソンの血を引いている。「皆、同じ日本人でいいじゃないか」という意見は、日本では非常に受け入れられやすい、というより至極当然の認識とされてきたように思う。よく言えば、国内を均一化して差別観をなくす作用を促し、悪く言えば、地方の独自性を否定して反抗心を削ぐ方向へ導く。血縁的に違いない、という実状の共通する事を思えば、「皆、同じ英国人でもいいじゃないか」となつても不思議ではなかつたはずだが、そうはならなかつた。何故なのか。侵略し、抑圧してくる相手に対し、人々は違和感を抱き、その存在を異なる者と見做す。アイルランドの独立運動は、「ケルト文学復興運動」ともにあつた。敵とは異なるものであるとすると心が、ケルトというアイデンティティへの願望に火をつけた、と言えようか。

文学・文化復興の牽引役となつた芸術家の多くが、皮肉にもケルトよりアングロ・サクソンの血を引く移住者の子孫であり、やはり「ケルト」とは所詮、巨大な幻想である」と評する学者もいるのである。しかし、その幻想こそが人々を動かし、アイルランドという独立国を生んだと言えなくもないのだ。日本においても「蝦夷」という概念が大和朝廷側の中華思想が創作したものである可能性はあるが、その概念が東北の人々を長年に渡り脅かし、結果的に阿豆

か」という意見は、日本では非常に受け入れられやすい、というより至極当然の認識とされてきたように思う。よく言えば、国内を均一化して差別観をなくす作用を促し、悪く言えば、地方の独自性を否定して反抗心を削ぐ方向へ導く。血縁的に違いない、という実状の共通する事を思えば、「皆、同じ英国人でもいいじゃないか」となつても不思議ではなかつたはずだが、そうはならなかつた。何故なのか。侵略し、抑圧してくる相手に対し、人々は違和感を抱き、その存在を異なる者と見做す。アイルランドの独立運動は、「ケルト文学復興運動」ともにあつた。敵とは異なるものであるとすると心が、ケルトというアイデンティティへの願望に火をつけた、と言えようか。



「ケルトの国」 イングランド・コーンウォールにて 2002年

近年、「蝦夷」を主人公とする小説が多く書かれ、東北人の誇りとして認識されるようにさえなつてきた。かつて押し付けられたはずの概念を、自らの抵抗の旗印として復活させる。それは単なる幻想に終わらず、「東北学」など学問的な運動にも支えられて従来の闇の歴史ではなく、堂々たる東北のアイデンティティの基盤として定着してきた感がある。しかし、東北人の心をひとつにするまでに至つていないのは、東北がそれだけ複雑な歴史を経、多様な側面を持つているという事なのかも知れない。

「連合国家の一員として、且つ自立した小国として」かつてないあり方を試行するケルトの国の姿は、東北を始め日本の各地方にもその「あるべき姿」を示唆するかのようである。あらためて、東北のあるべき姿とは、何か。東北の復興は、まだ遠い彼方にあるのかも知れない。



齋藤浩昭氏

プロフィール
(株)アイリンク代表
宮城県角田市出身
一九六四年生まれ
角田高校卒、岩手大中退
一九九二年コンビニで独立
二〇〇〇年アイリンク創業

牡蠣を東北復興の象徴に!

今般の大震災により、三陸の牡蠣養殖場の牡蠣筏(いかだ)、作業所のほとんどが津波で流され、三陸の牡蠣は市場から消えた。あまりの被災の状況を見て、誰もがしばらく三陸の牡蠣は食べられないかと思つたことだろう。しかし、予想以上に早く立ち上がった。生産者も頑張り、流通等の大口も立ち上がり、全国の消費者も応援した。多くの支援者の手により着々と復活しつつある。

今回は、流通のプロである(株)アイリンクの齋藤社長に、この一連の牡蠣産業の復興の状況と将来についてお聞きする。

まず齋藤社長は、壊滅した牡蠣産業復興に不可欠の船、作業場の設備、資材、種牡蠣、稚貝の仕入れ費用を調達するため、ネットショップでの牡蠣流通事業の経験をもとに、一口一万円

「東北の企業家」

大震災で痛手を受けた企業は数え切れない。一方、この大震災に立ち向かう企業も多々存在する。また、

二〇〇二年、海鮮直送 旨い!牡蠣屋オープン
二〇〇四年、グリーンシー ト株式銘柄指定
二〇一二年二月、かき小屋「渡波」開店、四月、同「仙台港」開店

の「復興支援・牡蠣オーナー制度」で、生産者の復興支援を手がけられた。次に、今年に入り仕掛けたのが、牡蠣刺(む)き作業場の復旧がなかなか進まない状況のなかで、殻つき牡蠣をそのまま顧客に提供して生産者の復興を支援することであった。実際、国内では殻なしの剥いた牡蠣しか流通しておらず、殻つきの牡蠣を提供するには従来の手法ではむずかしいのである。

そこで殻つきの牡蠣をそのまま提供する「かき小屋」のオープンとなった。まず、かき小屋「渡波」設立経緯を教えてください

実は震災発生前から仕掛けようと考えていた。震災で地元の牡蠣が売れず、外国産や広島のものばかりが市場に出回っていた。しかし復旧・復興に果たす民間事業の貢献は計り知れない。それを担う東北の企業家たちがいま何を考え、どう行動しているのかを聞き出す連載コーナー。

二〇〇二年、海鮮直送 旨い!牡蠣屋オープン
二〇〇四年、グリーンシー ト株式銘柄指定
二〇一二年二月、かき小屋「渡波」開店、四月、同「仙台港」開店

かき街道「構想案もあるが、多店舗展開の課題もありなかなかむずかしい。養殖牡蠣は夏場提供出来ないことも課題だ。しかし「三陸の牡蠣」をどんどん売り出して行きたい。(岩牡蠣は夏でも提供できると聞いたが、いよいよやるようである)

「かき小屋」は三陸にはなかった?
九州にはたくさんあるが、三陸には松島など僅かしかなかった。今回福岡の業者さんに「かき小屋」運営のノウハウを提供してもらった。これは復興支援である。

渡波の次は仙台港
養殖牡蠣の最盛期、仙台は四月で、養殖牡蠣の終盤の時期というむずかしさもあつたし、高速道路無料化終了とか、いろいろとハンデがあつた。

今後の「かき小屋」展開
気仙沼・唐桑に間接的に関与している先がある。さらに三陸を北上する「三陸

フランスの牡蠣は多くは日本産である。そのフランスへ三陸の漁業者とフランス式養殖の視察に行った。今月ベトナムに行く。牡蠣事業はグローバルな産業だ。伝説も大事だが、海外と交流して、生産ノウハウの交換も必要だし、教えてもらえば良いと思う。

「かき小屋」から「オイスターバー」への展開?
地元産だけのかき小屋と産地問わずのオイスターバーとの中間を目指していた。仙台港はトライケースだ。

観光事業とのタイアップはあるか?
もつとPRが必要だし、牡蠣以外の他の水産素材の開発も必要だ。フランスでは牡蠣と同様にムール貝も手がけていて、季節によってバランスをとっている。見習うべきところである。東北は素材に恵まれていることに気付いていない。資源の再発掘が必要だ。モンサンミッシェルは昔、三陸と同じように被災した街だったが、いまは水産と観光で栄えている。東北もやればできるはずだ。東北の良さを堪能して欲しい。

海外への出張も多い?
一九七〇年にフランスで牡蠣が全滅しかけたことがあり、そのため日本から種牡蠣を送っており、結果

牡蠣には地元の日本酒が合うと聞いたことがあるが、三陸の牡蠣には三陸のお酒が合うはず。被災した酒造メーカーとの「高級日本酒ワンカップ」とかき小屋コラボ企画を仕掛けてみてはどうか?三陸の牡蠣と三陸の日本酒は最高の組み合わせではないか?

ぜひこの新聞で呼びかけていただきたい。大歓迎だ。
東北の水産業はいつまでも素材産業のままか?
素材産業から、高付加価値の食材に転換していく道が求められている。それを素材の発掘とともに追求していく必要がある。

水産業への民間企業参入をめぐる宮城の漁協と知

事の上対立があるか?
仲良くなる道はみつかるはずだ。漁業者と流通や飲食などの異業種と組めば、もつと道は開けるはずだ。

阪神大震災発生三年後に、復興特需は消え、突然不況が来ると言われているが、東北は大丈夫か?
大阪の経営者にも言われた。必ず復興不況は来ると。だからこそ、復興特需頼みから脱して、新しい産業を興さなければならぬ。時間にはあまりない。急がなければならぬ。

企業家として、政治と行政に望むこと
復興支援事業の告知はもつと分かりやすくして欲しい。申請書は書くのが大変だ。迅速対応が必要なので何とかして欲しい。

最後に復興について一言。
牡蠣は東北復興の象徴になりうる。それを目標に個人的な復興のモットーを掲げつつ挑戦していきたい。

ありがとうございます。
齋藤氏の復興モットー
復興の本当の意味は単に震災前に戻るための「復旧」ではなく、震災前よりも遙かによい状態にすること

何かも初物尽くしの新聞創刊でありました。新聞を発行するのはもちろん、取材旅行やインタビューも、新聞用の写真撮影も、記事の割付も、校正も、言語変換作業もすべてが初体験でした。したがってすべてが手探り状態で、迷えば助に頼るのみ。無我夢中の創刊作業でした。

さらに無謀にも外部に創刊時期を公表して、何としてみやり遂げると宣言してから着手しましたので、締切りが近づくとあせりとプレッシャーは尋常ではないレベルに到達しました。でも約束は何とか果たせましたが、本当にはらばらものでした。そんな裏事情にもかかわらず、何とか創刊までたどり着きました。まずはほっとしております。

目指すのは、山椒のように小粒でもピリッとした存在感のある新聞です。そして、さまざまなサイトにあふれた時代にあつても、この新聞のことをいつも思い出してくれようという新聞を目指したいと思ひます。

継続は力。毎月の発行です。正直に言えば、創刊号発行の疲れを癒すため、少し休養したいのですが、もう第二号の発行準備に取り掛からなければなりません。疲れた体と心にムチ打って、第二号企画を完成させなくてはお互いに励ましあっている直近の状況でした。

(スタッフ一同より)

編集後記

何かも初物尽くしの新聞創刊でありました。新聞を発行するのはもちろん、取材旅行やインタビューも、新聞用の写真撮影も、記事の割付も、校正も、言語変換作業もすべてが初体験でした。したがってすべてが手探り状態で、迷えば助に頼るのみ。無我夢中の創刊作業でした。

☆革物屋☆

かわもんや
http://prewords.jp/
E-Mail: contact@prewords.jp
TEL/FAX: 042(562)3507

Prewords

新聞創刊
ディスカウント
(20% OFF)

※カラー展開はそれぞれ5色
オレンジ: 鮮やかな橙色、使い込んだ後の深みを楽しみ
キャメル: 5色の中で最もヴィンテージ感のある色合い
ブラック: スタンダードな黒、ビジネスにもプライベートにも
ワインレッド: 落ち着きのある大人の赤
グリーン: 深みのある優しい緑

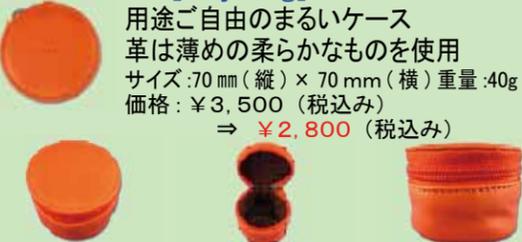
【Handy Pouch】

モバイル機器収納など、用途は自由自在
革は薄めのやわらかいものを使用
手触り感を重視
サイズ:105mm(縦)×210mm(横)×60mm(奥行)
価格:7,800(税込み)⇒¥6,240(税込み)



【Tiny Log】

用途ご自由のまるいケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒¥2,800(税込み)



【Tiny Dice】

用途ご自由の四角いケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:3,500円(税込み)
⇒¥2,800(税込み)

